

皆の広場

素人の歴史考⑮「能登の古代史」

自文科 永野 徹

H21.7.15

(1) はじめに

1) コシの能登

コシは(越・高志・古志)と漢字表記される。

古代大和朝廷の飛鳥文化については、百済の影響よりも多分に高句麗の影響が見られる。百済文化は主として九州筑紫から瀬戸内海経由で伝来したと考えられており、一方新羅・高句麗の文化は日本海地方から大和へ伝来したようである。日本海は古代において中国、韓国、東南アジア、ロシアからの文化交流の窓口であった。

西回り文化(対馬海流):九州、中国江南、朝鮮文化の伝来

東回り文化(リマン海流):東北・蝦夷・北海道、高句麗・渤海、シベリア・サハリン

2) 古文書のコシ

- ・万葉集「新羅斧」
- ・今昔物語「犀角入り漆箱」
- ・六国史「朝鮮三国・船漂着記事」

3) 高句麗文化とコシ

- ・能登蝦夷穴古墳、古磨志彦神社
 - ・飛鳥寺の伽藍配置(高句麗の清岩里廃寺様式)
 - ・聖徳太子の師(慧慈)は高句麗の僧
 - ・高松塚古墳に高句麗の影響が見られる。
- 727年国交関係樹立(第1回)～第2回(739)・・・合計35回/180年間
9世紀はじめに福良津の客院建設
高句麗=コマ(高麗・狛)、宣明暦(奈良～江戸時代まで)
コシの漢字文化交流:酬唱漢詩文の交換

4) 能登の神々

- ・能登の神社は17社(延喜神名帳)、式内社43社、社名にヒコ・ヒメが多い。
- ・七尾市の祭神:気多神・住吉神・八幡神・山王神・薬師・石神・出雲神など。
- ・例外として出雲神社系の宿名彦と新羅系の石神神社が多く見られる。
- ・式内社: 美麻奈比古神社、比咩神社

5) 軍団整備

- ・能登の軍団は鳥屋町に設置された。3つの山は狼煙の遺跡
- ・軍団は大国(1000人以上)、中国(600人～1000人)、小国(500人以下)
隊制は伍(5人)、火(10人)、隊(50人)、

6) 租庸調

- ・能登では8世紀半頃から班田制が施行されたのではとされている。
- ・調、庸を都まで運ぶのは民衆の負担であった。(平安京まで往18日、復9日)
- ・土器・塩は生産していたが能登の税対象外であった。
- (租)延喜式で能登国から田租穀(4000斛)を民部省へ治め、15万束の出挙
- (調)手工業品と収穫物(糸・絹・イロ・呉服・・・)
- (庸)真綿・
- (贄工)天皇の食膳に供する食物:鯖、ワカメ
- (薬)宮内省に納めるもの:黄蓮・菱・ヤマモ
- (能登から都奉仕)
- 743能登臣忍人が平城京の写経師として仕える。(右大舎人～左舎人)
- 760能登臣男人が造大寺司の画師として奉仕。

7) 弥生・古墳時代前期の越(越中・加賀・口能登・羽咋・七尾・・・)

- ・”北つ海の道”の交流がかなり古くから始まっていた。
- ・漁業生活中心の場で焼き塩生産はなされていた。
- ・玉の生産については、弥生中期から古墳時代前期にかけて、出雲から佐渡にかけて既に玉生産がなされていたが古墳時代中期に機内型古墳(越前河和田遺跡・加賀・片山津遺跡)からは異質の玉が生産開始されたようである。
- ・弥生時代後半、首長を中心に共有集団労働(農業共同体)が形成されてきた。
- ・4世紀末から5世紀前半に地域的政治体制が確立されて巨大古墳が出現する。
- 七尾市の邑知地溝帯には単なる墓ではなく記念的建造物である巨大古墳出現。
小田中親王塚(円墳: Φ67m * h17.5m)
雨の宮一号、二号とも:(前方後円墳:l=70m
亀塚古墳(円墳: Φ50m)

8) 大和とコシ

- ・7世紀後半まで大和朝廷とコシの関係はそれ程深くない。
- ・コシが漢字で(高志・古志・越)と宛てられたのが帝紀・旧辞とすると6世紀半以降

- ・越前国の誕生は692年(持統紀)浄御原令が諸司に頒布されてから3年後である。
- ・記紀にも古事記の一部だけで殆ど出て来ない。むしろ出雲との関係が深い。
スサノオと「高志の八俣の大蛇」、八千矛神と「高志国の沼河比女」、国引き神話の「高志の都都の三崎」、出雲の国神門に「高志郡」など
邑知地溝帯七尾市に巨大古墳群が出現(5C末から6C/B)、
市内唯一の前方後円墳である高木森古墳と東部の矢田丸山古墳群(5C)は周辺円筒埴輪を廻らしている。これ等の首長が国造本紀に羽咋国造・能登国造と記される人物と関わるものであろう。

9) 能登とコシ国造

蘇我氏は6世紀前後に遠交近攻政策を取り高麗と外交を開く。
口能登の首長たちの中でヤマト政権・蘇我氏と関わりを持つものが現れた。
531～539年 コシ出身の継体天皇がヤマト政権に入る
570年欽明天皇 江淳が高句麗人の漂着をヤマト朝廷に申し出る
571年敏達天皇 高句麗人を山城に受容れるべく膳臣傾子を派遣
589年崇峻天皇 阿倍臣をコシへ派遣「越ら諸国の境を觀しむ」
※高句麗は551年に新羅・百濟連合軍に敗れて倭国に使いを出した。
中でも、5C末三国出身の男大迹大王(オウノオウ=継体天皇)から欽明天皇時代に570年に南加賀の江淳裙代(エヌモシロ)が、高句麗使が漂着した時にコシ口能登の豪族「道君」が隠匿していると申し出たとある。
この時中央政権は蘇我稲目・馬子の父子で山城の国相樂郡の外交館に迎える方針で膳臣傾子(カンワテカタゴ)を派遣し朝貢物を没収した。
これは、コシの豪族がヤマトに従属したと言うより、当時日本海側の首長たちが相対的にヤマト政権とは自立性を持った地域であったとの見方もある。
またヤマト側では蘇我氏の新羅との遠交近攻政策上、高句麗との外交関係を開いたと言う事でもある。
北陸地方の豪族「道君臣」を配下にして、ヤマト政権は道氏の主張したような地域的君主を承認したものと認められる。
越国造である阿倍臣・膳臣・佐々城山君・筑紫臣・伊賀臣は道氏らと同じ大彦命を同祖として配慮している。
高志・越国造と道氏とは同祖関係と伝えている。(国造本紀)
近江における佐々城山君・高志国造道氏・加宜国造・能登国造・高志深江国造のラインが旧の近江三尾氏ー加賀江淳氏ー加我国造氏ー羽咋国造氏の旧系統(継体天皇系統)に入れ替わったと見られる。
口能登の豪族道氏が「能登国造」「羽咋国造」に任じられる程勢力を持った。

10) 能登の国造

大化改新で班田収受も造籍も行われずに唯、蘇我氏滅亡の動揺を抑えるために地方に新政権の軍事使・伝宣使の派遣が実態のようでありコシもその通り。
平安時代の「国造本紀」では北陸の国造の任命は以下の記載があるが早すぎ
能登国造は成務天皇時代に彦峽嶋命(ヒコサシマノミコト)が任命記事
羽咋国造は雄略天皇時代に石城別命(イキワケ)の任命記事。
実態は6世紀末に蘇我氏が地元の豪族道氏を国造に任命したのが最初。
七尾線徳田の「院内勅使塚塚古墳」は横穴石室式方墳で壁面の切石加工が飛鳥の古墳と装飾も似ており、能登国司任命との関連で理解される。
北陸の部民の特色を石川県地域で指定された3種の代表的な部民として
・6世紀末～7世紀初に置かれた子代の部民
・特定の技術者としての部民
・ヤマト有力紙族の私民としての部民
であるが、能登では若倭根子日子大比比命ワヤマトネコオビヒミコト(開化天皇)の名代としての若倭部と鳳至群の船木部がある。

11) 律令製とコシ

640年皇極天皇時代に百濟大寺の力役で「近江と越と丁」の徴発が出た。
大化改新(645)で新政府の派遣した国司は兵器没収と馬や関連物資の徴発と新政府の宣伝が主たる役目であり、むしろ蝦夷征伐が主たる目的であった。
・659年阿倍臣を将軍として蝦夷征伐事業が強力に進められた。
・北陸国造も参加したが660年へロベ嶋の戦いで能登臣が戦死した。
・689年飛鳥浄御原令により越前国が設置され、蝦夷対策が強化された。
・708年北陸越前に新国司・高志連村君が始めて任命された。
・越前国能登郡が成立しこれまで国造の能登臣氏が郡司に任命された?
・能登地域の郡司
・709年蝦夷対策として北陸四国に軍用船100隻の造船と力役が命じられた。
・717年最上川南岸の出羽の柵へ越前・越後・信濃・上野の四カ国入植計画
・718年越前の羽咋・能登・鳳至・珠洲の4郡を持って能登国が設置された。
・この当時越前国は多治比真人広成が按察使として所管していた。

- ・能登国の駅舎整備(越蘇・穴水・撰才・三井・太市・待野・珠洲)による掌握。
- ・732年能登から平城京へ調を運搬した記録・木簡がる。(郡里制)
- ・741聖武天皇・恭仁京へ遷都時に官制縮小として能登国を越中国へ併合
※前年(740)大宰府で藤原広嗣の反乱があり平城京から恭仁京に遷都
- ・746大伴家持30才は越中国衛として伏木(高岡市)に着任
- ・749年大伴家持が能登巡行で能登に対する律令政治の強化が見られる。
- ・752年鳳至郡大屋郷の調に能登臣智麻呂の名がある。
- ・757年能登国を越中国から改めて分立
再設置理由は駅舎利用の負担軽減のため官舎整備を求めたもの
光明皇后・藤原仲麻呂が橘氏、大伴氏を押切り東北蝦夷征伐の体制強化
唐・新羅の政権不安定で北陸の警備強化(唐安史の乱、753新羅使節不調)
- ・758年唐の消滅は渤海使(小野田守)も報告していた。
- ・760年初めて能登国専任国司・高元度が任命された。(能登で班田前初調査)
- ・764年能登国二代目国司(村国連子老)は恵美押勝の差配
(称徳帝と道鏡への反乱、越前国国司=押勝の子(藤原辛加知)を任命)
- ・780年越中国は糶(ホシイ)三万斛(コク)貯蔵し、東北反乱対策・蝦夷対策の前進基地
東北蝦夷の反乱で多賀城が壊滅状態となったと言う背景がある。
- ・791年阿倍朝臣人成を国司。792年兵士制を廃止して健児(コンゼイ)50人指定
- ・804年 桓武天皇:渤海使の客院設置を求める。(北陸は蝦夷より渤海が大事)
- ・808年 平成天皇:越蘇駅、穴水駅、鳳至駅の廃止。(桓武帝ノ財政破綻策)
- ・823年外交使対応の官舎を加賀国に整備した。
- ・824年新羅から漂着したものあり。(819唐の反乱、822新羅反乱で能登渡来が増)
- ・838年遣唐使派遣の停止、842年藤原衛は新羅人の入国禁止
唐・新羅と国交断絶し渤海とのみ国交を続ける時代に入った。
- ・859年 渤海使104人「宣明曆」を持参、福良港の官港化と客院造営

12)能登の輪島(鳳至:フゲンシ)

鳳至地域社会

3世紀後半から4世紀はじめに掛けて能登でも農業生産の発達に伴い小地域社会が形成されていった。鳳至川、塚田川流域に四ツ塚古墳、稲船横穴古墳群が形成され始めたのは6世紀後半～7世紀に掛けてからである。

船木部

能登号族がヤマト政権の国造に任命されたのは7世紀前後である。
能登国司は直接支配下の人民を若倭部に指定したとおもわれる。
正倉院に残る銘文に鳳至の舟木部とあり、鳳至にも船木部が置かれていた事が判明した。

鳳至郡

輪島に古代国家の行政区画が出来たのは、701年大宝律令による鳳至郡である。
718年能登国の誕生により、越前国より分かれて羽咋・能登・珠洲・鳳至の四郡。
能登臣の一族で鳳至の郡司、郡家、駅など順次整備されていったのであろう。

大伴家持(32歳)

国司巡行 749年越中国鳳至に越前国司の大伴家持がはじめて巡行してきた。
巡行の経路は家持の五つの歌から仁岸川～八ヶ川～若狭川～鳳至川？。

神社

古代輪島地域の神々は延喜式に見える九座でいずれも小さい。
鳳至郡の式内社はすべて、ヒコ神かヒメ神で美麻奈比古・比咩神は対になっている。

13)古代の珠洲

はじめに

スズ地名 珠洲の郡名は延喜式の『須須神社』の須須=ス≡スズ=珠洲となる。
珠洲は能登半島の先端地で航海の異変を知らせる烽(のろし=すず)を使用。
ススはミホ・ススミ神名のススミでもあり、烽(ノロシ)の古訓ススミでもある。

珠洲郡 718年:珠洲の地名が始めて大和朝廷の記録に登場する。それまで珠洲郡は越前国の珠洲郡であったが、羽咋・能登・鳳至の3郡に珠洲郡を含めて能登国とされた。
能登の国造任命時期について5世紀後半から6世紀書記の雄略天皇頃の推定もあるが早くも蘇我馬子が実権を握った6世紀後半であろう。珠洲の若倭部指定も

その後であり、大和朝廷の官人が直接地方に来てでなく、能登の豪族が国造に任じられてから国造から若倭部・屯倉指定があったと考えられる。
若倭部(ワカタベ)は開化天皇(若倭根子日子大毘毘命)名代の民。(儀式・供物・貢納)

古墳 珠洲地域には5世紀末には全くヤマトの影響は見られず、古墳時代後期の6世紀末に突然、永禪寺古墳群が表れる。(高塚古墳:円墳)

神社 珠洲の式内社は古麻志比古神社・須須神社・加志波良比古神社の三社である。これ以前の祭祀は日子座王命(ヒコマスオウミコト)で、出雲神魂神社の系統であろう。朝鮮のコモス(熊麗)がカモス(神魂)＝カミムスビ(神産巢日神)と繋がる。従って珠洲若山川流域は出雲の信仰圏とつながる。日子坐王は開化天皇(諡号は若倭根子日子大毘毘命)の子神とされた。延喜式に見える須須神社と高倉彦神の社とは同じ神社である。つまり高座神は高倉神である。更に美保須須見命は出雲の大穴持命と高志の意久都久辰為命(オキツクシイ)の娘=奴奈宣波比売神(ヌナカヒメ)との子神美保須須見の神は能登を含めた越と出雲を結ぶ神格である。

律令制度

珠洲地域に律令制による郡制が施行されたのは、越前国能登郡から能登国珠洲郡に切り替わった718年以前である。
翌年719年に越前国守多治比広成が按察使(アセチ)として能登・越中・越後三国三国の所管を命じられているので事実上はまだ越前国守の管轄下にあった。この頃から国衙は越蘇駅近くに、中央から国司の下級官人が配され珠洲には郷・里の行政区画が整えられたと推定される。
令制下、珠洲郡には日置・草見・若倭・大豆の四郡と余戸がおかれた。(1郷=50戸)
珠洲郡の四郷は715年に、それ以前の里が郷とされた行政区画である。
珠洲郡家(クウケ)の設置は760年能登専任国司任命、843年のと国分寺設置の頃に整備されたと考えるのが妥当であろう。

渤海使 859年珠洲郡に26回目の渤海使が乗った船が着いた。一行は使節長「烏孝慎」以下104名で郡家に迎えられた。(珠洲の管轄下では3回目であった。)
859年6月には上京したが先帝の喪中で入京できずに7月に帰国した。
この時貢上物が2年後の861年に頒行された宣明歴で1684(江戸)まで正暦とされた。